

中学校・高等学校教員養成課程（保健体育）学生の教師効力感

— 生徒理解の側面から —

A Study on the Characteristics of Teacher Efficacy of Teacher Training Students (Health and Physical Education)

— From the Viewpoint of Student Understanding —

体育学部体育学科

平田 佳弘

HIRATA, Yoshihiro

Department of Physical Education

Faculty of Physical Education

岡山県立大学保健福祉学部

京林由季子

KYUBAYASHI, Yukiko

Department of Health and Welfare Science

Okayama Prefectural University

Abstract : The purpose of this study is to clarify the awareness of teacher training students regarding student understanding. Subjects of the survey were university students enrolled in a junior high and high school teacher training course (health and physical education). The content of the survey was about the effectiveness of teachers in understanding students, anxiety about practical training, and how to understand “students who are difficult to teach” and “students with special needs”. As a result, the anxiety of practical training was significantly higher in the second grade than in the fourth grade, but there was no difference in other items depending on the grade. In the concrete image of “students who have difficulty in teaching,” the ratios of “inner tasks” and “inappropriate behavior” were high. In the concrete image of “students with special needs”, the ratios of “family situation instability” and “antisocial behavior” were high. It was considered that the issues were to consider the background and factors of the difficulty of instruction, and to integrate the viewpoint of educational counseling and special support education with the viewpoint of student guidance.

Keywords : student understanding, students with special needs, junior high and high school teacher training course

I. はじめに

渡邊・中西（2017）は、『多忙かつ精神的にも負担が大きい教員という職においては、職務内容に立ち向かうにあたり、「与えられた課題を自分自身がうまくできる」という自身の行動への信念が極めて重要であると考えられる』と指摘している。このような「教育場面において、子どもの学習や発達に望ましい変化をもたらす教育的行為をとることができる」という教師の信念をAshton（1985）は「教師効力感」と定義しているが、教員の専門性の向上に欠かせない資質として近年その重要性が指摘され、教員としての成長や、教員のメンタルヘルスとの関連など多様な研究がなさ

れている（渡邊・中西，2017）。教員養成段階から教師効力感を高めることを意識した指導を行うことは、教師の教科指導力や学級運営などの向上につながると考えられ、教育実習の影響を中心とした教員養成課程学生を対象とした研究も多くなされている（相澤・増田，2016；五十嵐・宮内，2020）。

平田・京林（2021）は、春原（2007）の教育学部生用教師効力感尺度などを参考に関連変数を加えた教師効力感に関する調査表を試作し、教育実習前後の教員養成課程（保健体育）学生の教師効力感の特徴について検討している。そこでは、教師効力感の下位領域「教授・指導」の得点の一部の群で教育実習前よりも教育実習後に向上が見られたものの、他の下位領域で

ある「学級管理・運営」「生徒理解・人間形成」の領域については教育実習の前後で変化は見られず、その面への指導に課題が残された。

生徒理解に関して柳川・大谷（2015）は、中学校は「発達の問題や行動・情緒の問題が複雑に絡んで、最も表面化しやすい時期」と指摘している。中学校では教科担任制や生活指導の重視など小学校からの環境の変化が大きく、生徒も思春期という不安定な時期にある（文部科学省，2011）。さらに現在、生徒の様相はますます多様化しており、不登校、いじめ、貧困、障害に応じた指導、日本語の能力等に応じた指導などへの対応が求められ（文部科学省，2016）、教科指導や生徒指導において様々な指導の難しさが生じると考えられている。教科指導においても生徒指導においても教育実践の大前提となるのは生徒理解であるが、生徒の示す困難さや行動の問題を教員がどのように理解するかが支援を考える手がかりになる。そのため、教員養成課程学生の教師効力感を検討する上で、学生の生徒理解に関する意識を把握しておくことが必要となろう。

II. 目的

本研究では、教員養成課程で学ぶ大学生の生徒理解について、「生徒理解・人間関係」教師効力感と教育実習不安、「指導が困難な生徒」および「気になる生徒」の捉え方の側面からその特徴を明らかにすることを目的とする。

III. 方法

1. 調査対象

IPU環太平洋大学教員養成課程（保健体育）在籍学生の内、2021年度「教職実践演習」受講の4年生124名、「保健体育科指導法Ⅲ」受講の2年生114名を調査対象とした。

2. 調査方法

Google フォームによる無記名のwebアンケートとした。調査にあたっては、「調査は、実習生の生徒理解に関する意識について調べ、教員養成カリキュラム検討の参考としていくことを目的としている」こと、「回答結果は調査研究以外に使われることはなく、回答結果が個人の成績や評価に関係することはない」ことを説明し、同意を得た上でwebのフォームに回答するよう依頼した。その結果、回答が得られた4年生

123名、2年生90名を分析対象とした（表1）。

表1 回答者内訳

		全体	志望進路			
			教員	公務員	企業	その他
体育学科	4年生	123	46	20	49	8
	2年生	90	62	12	13	3

3. 調査内容

調査項目は、秋光・大木（2020）、平田・京林（2021）他を参考に、以下の①～④より構成した。

- ①「生徒理解・人間関係」教師効力感：平田・京林（2021）において用いられた調査項目より、生徒理解に関する以下の5項目（5段階の評定尺度）を用いた。
 - ・特別な支援を必要とする生徒にどのように関わればよいかわからない。（反転項目）
 - ・生徒たちの中にすぐ溶け込めるか心配だ。（反転項目）
 - ・生徒の心をつかむのが上手である。
 - ・生徒との親密な人間関係をつくれるかどうか不安だ。（反転項目）
 - ・PTAなど保護者と関わる行事はなんとなく気が重い。（反転項目）
- ②教育実習不安：平田・京林（2021）において用いられた調査項目より、教育実習不安に関する以下の2領域14項目（5段階の評定尺度）を用いた。

〈授業実践力〉

 - ・教え方が未熟で授業を聞いてもらえないのではないかと不安だ。
 - ・うまく授業をすることができず取り乱しそうで不安だ。
 - ・手際よく実技指導ができないのではないかと不安だ。
 - ・生徒にわかりやすい授業ができるか不安だ。
 - ・生徒の雑談が多くなり、收拾がつかなくなりそうで不安だ。
 - ・授業中に予想外の質問がでたら、パニックになるのではないかと不安だ。

〈生徒関係〉

 - ・生徒たちが自分の授業をきちんと理解してくれるか不安だ。
 - ・生徒にいじめられるのではないかと不安だ。
 - ・今までと違う環境なので適応できないかもしれないと不安だ。

- ・生徒たちとうまくやっていけるか不安だ。
- ・人前で話すこと自体が不安だ。
- ・授業の途中に失敗をして生徒にばかにされるのではないかと不安だ。
- ・生徒がなめてかかってくるのではないかと不安だ。
- ・学校側とうまくやっけないのではないかと不安だ。

③学級の中で「指導が難しい」と考える生徒の特徴（自由記述）。

④大学生自身が「気になる生徒」と感じる特徴、および、中学校で重視されていると思う「気になる生徒」の特徴：秋光・大木（2020）による以下の11項目を用いた（11項目より3項目選択）。

- ・学習面で心配な生徒（授業中の様子や行動、成績などの学習面が心配）
- ・基本的な生活習慣が気になる生徒（学校での生活や行動の様子から、家庭での生活習慣が気になる）
- ・家庭状況不安定生徒（保護者の養育態度や経済状況が気になる）
- ・不適切行動生徒（周囲の目を意識して（気を引こうとして） unnecessaryな言動をする）
- ・消極生徒（おとなしくて、自分から積極的に友達の輪に入っていくことができない）
- ・多動生徒（多動傾向があり、授業中立ち歩くなど落ち着きがない）
- ・感情不制御生徒（攻撃性、衝動性が強い）
- ・対人関係不適応生徒（友達がほとんどおらず、一人で行動しがち）
- ・友人関係不適応生徒（友達から避けられている傾向があり、友達の輪に入れてもらえない）
- ・規則不適応生徒（学校や学級でのルール、教員の指導を守らない・守れない）
- ・反社会的行動生徒（学校内外を問わず、犯罪行為など反社会的な行動が目立つ）

IV. 結果

1. 教師効力感

「生徒理解・人間関係形成」教師効力感の得点を表2、図1に示す。得点が高いほど教師効力感が高いことを示している。

4年生の「生徒理解・人間関係形成」教師効力感の平均得点は3.15点であった。得点が高かった質問項目は、「生徒の心をつかむのが上手である。」3.76点、低かった項目は「PTAなど保護者と関わる行事はなん

表2 「生徒理解・人間関係形成」教師効力感得点

		全体	志望進路			
			教員	公務員	企業	その他
4年生	Mean	3.15	3.03	3.23	3.27	2.95
	SD	0.87	0.78	0.76	0.94	1.19
2年生	Mean	3.00	2.98	3.13	3.02	2.87
	SD	0.57	0.54	0.69	0.63	0.42

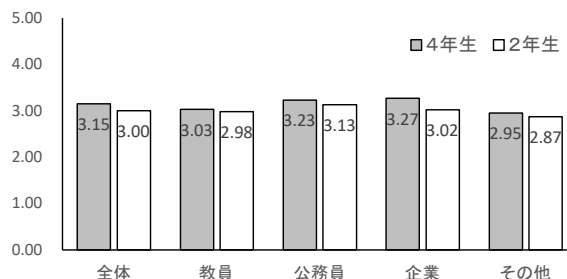


図1 「生徒理解・人間関係形成」教師効力感得点

となく気が重い。（反転）」2.78点であった。志望進路別の「生徒理解・人間関係形成」教師効力感の得点に有意差は見られなかった。

2年生の「生徒理解・人間関係形成」教師効力感の平均得点は3.00点であった。得点が高かった質問項目は、「生徒たちの中にすぐ溶け込めるか心配だ。（反転）」4.07点、低かった項目は「PTAなど保護者と関わる行事はなんとなく気が重い。（反転）」2.27点であった。志望進路別の得点に有意差は見られなかった。

また、4年生と2年生の学年の違いによる「生徒理解・人間関係形成」教師効力感の得点に有意差は見られなかった。

2. 教育実習不安

「教育実習不安」の得点を表3-1、表3-2、図2に示す。得点が高いほど不安が強いことを示している。

4年生の全体の平均得点は2.66点、領域別では「授業実践力」が3.08点、「生徒関係」が2.24点であった。「授業実践力」の不安が高い質問項目は「生徒にわかりやすい授業ができるか不安だ。」3.56点、低い項目は「授業中に予想外の質問がでたら、パニックになるのではないかと不安だ。」が2.54点であった。「生徒関係」の不安が高い質問項目は「今までと違う環境なので適応できないかもしれないと不安だ。」2.64点、低い項目は「生徒にいじめられるのではないかと不安だ。」1.62点であった。志望進路別の「教育実習不安」の得点に有意差は見られなかった。

2年生の全体の平均得点は3.15点、領域別では「授業実践力」が3.71点、「生徒関係」が2.58点であった。「授業実践力」の不安が高い質問項目は「生徒の雑談が多くなり、收拾がつかなくなりそうで不安だ。」4.20点、低い質問項目は「授業中に予想外の質問がでたらパニックになるのではないかと不安だ。」が3.21点であった。「生徒関係」の不安が高い項目は「人前で話すこと自体が不安だ。」2.90点、低い項目は「生徒にいじめられるのではないかと不安だ。」1.89点であった。志望進路別の「教育実習不安」の全体得点および下位領域の授業実践力得点に有意差は見られなかった。

4年生と2年生の学年の違いによる「教育実習不安」の合計得点および下位領域の「生徒関係」得点、「授業実践力」得点は、2年生が4年生よりも有意に高かった（順に、 $t=4.331, p<0.001$; $t=2.796, p<0.01$; $t=5.029, p<0.001$ ）。

表3-1 4年生の教育実習不安の得点—志望進路別—

全項目		全体	志望進路			
			教員	公務員	企業	その他
	Mean	2.66	2.74	2.56	2.60	2.80
	SD	0.92	0.86	0.78	0.88	1.64
下位領域	生徒関係	Mean	2.24	2.24	2.18	2.61
	SD	0.92	0.89	0.70	0.92	1.51
	授業実践力	Mean	3.08	3.23	2.88	3.01
	SD	1.03	0.93	0.92	1.02	1.79

表3-2 2年生の教育実習不安の得点—志望進路別—

全項目		全体	志望進路			
			教員	公務員	企業	その他
	Mean	3.15	3.15	2.90	3.23	3.69
	SD	0.73	0.66	0.87	0.96	0.29
下位領域	生徒関係	Mean	2.58	2.59	2.31	2.65
	SD	0.81	0.77	0.89	0.98	0.44
	授業実践力	Mean	3.71	3.71	3.50	3.80
	SD	0.81	0.69	1.10	1.10	0.22

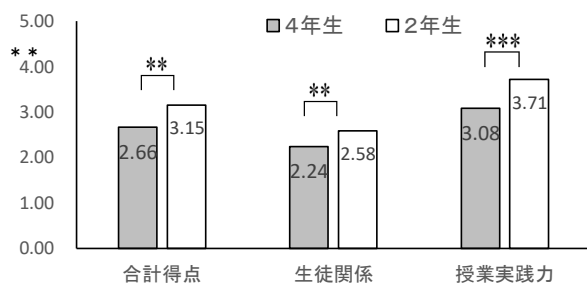


図2 教育実習不安得点

3. 「指導が難しい生徒」の捉え方

「指導が難しい生徒」の記述は4年生149記述、2年生124記述の計273記述収集された（一人当たりの平均記述数1.3記述）。これらの記述を、秋光・大木

(2020) のカテゴリーを参考に筆者ら2名でKJ法により以下の6つのカテゴリーを生成した。

- ①「内面の課題」：本人の内面的な課題。意思表示が乏しい、自尊感情が低い、無気力、孤立など。
- ②「不適切な行動」：教師との関係において、指導や指示が入らない状態。指導や指示に対する不適切な反応や反抗など。
- ③「発達上の課題」：発達障害や発達上の様々な特性に起因する課題。
- ④「社会性の乏しさ」：集団の中での態度や行動に起因する課題。
- ⑤「家庭との関係」：保護者や家庭環境に起因する課題。
- ⑥「その他」

各カテゴリーの記述数と記述割合を表4に示す。

4年生では“意思表示がない”“自己表現が少ない”“感情が表に出ない”など「内面の課題」に関して記述した学生が45.5%と最も多く、次に多かったのが、教師との関係において“話を聞かない”“言うことを聞かない”“反抗してくる”などの「不適切な行動」41.5%であった。なお、「不適切な行動」51記述の内35記述は“話を聞かない”“言うことを聞かない”という記述であった。「発達上の課題」については、14記述の内8記述に、“障がいを持った生徒”“発達障害などを持つ生徒”“特別な支援を必要とする生徒”など、障がいや特別支援という用語を用いた記述が見られた。

2年生では、「不適切な行動」に関する記述を回答した学生が47.8%と最も多く、ついで「内面の課題」が44.4%であった。2年生においても「不適切な行動」43記述の内過半数を超える25記述は“話を聞かない”“言うことを聞かない”であった。「発達上の課題」については、障がいという用語の記述は1記述で、他は“コミュニケーションが取りづらい”“落ち着きがない”などの状態に関する記述であった。

表4 「指導が難しい生徒」の自由記述の分類

カテゴリー	記述例	4年生		2年生	
		記述数	記述率(%)	記述数	記述率(%)
内面の課題	自分の意思表示をしない生徒。無表情。無気力な生徒。誰も話さない生徒。	56	45.5	40	44.4
不適切な行動	話を聞かない。言うことを聞かない。注意しても反抗してくる生徒。ルールを守らない。妨害する。暴れる。	51	41.5	43	47.8
発達上の課題	障がいがある。落ち着きがない。言葉が通じない。	14	11.4	14	15.6
社会性の乏しさ	自分勝手な行動をする。協調性がない。わがまま。自己中心的。	13	10.6	19	21.1
家庭との関係	家庭環境が複雑。保護者がモンスターペアレント	4	3.3	0	0.0
その他	分かったふりをする生徒。しっかりすぎている。	11	8.9	8	8.9

「指導が難しい生徒」の捉え方と、学年、志望進路、「生徒理解・人間関係形成」効力感、教育実習不安との関係について検討するため、4年生と2年生の2群について、志望進路については教員、公務員、企業他の3群について、「生徒理解・人間関係形成」効力感と教育実習不安については平均得点より上位の上位群と下位の下位群の2群について、各カテゴリーに含まれる記述をした割合に違いがあるかどうかを χ^2 検定により確認したところ、いずれも有意な差は見られなかった。

4. 「気になる生徒」の捉え方

「気になる生徒」の11項目の特徴の中で、学生自身が「気になる生徒」と感じる特徴、および、中学校で重視されると思う「気になる生徒」の特徴についてそれぞれ3つ選択した回答を学年別に整理した。

4年生自身が「気になる生徒」と感じる特徴(図3-1)では選択された割合が高い順に「家庭状況不安定」60.2%、「反社会的行動」58.5%、「基本的生活習慣」29.3%であった。中学校で重視されると思う「気になる生徒」の特徴も、高い順に「家庭状況不安定」55.3%、「反社会的行動」53.7%、「規則不適應」32.5%であった。回答者自身の意見と中学校で重視されていると思う「気になる生徒」の特徴は、「反社会的行動」と「家庭状況不安定」がどちらも50%以上の高い割合を占めていたが、「規則不適應」の項目において自分自身の意見よりも中学校で重視されると思う回答が有意に多かった($\chi^2(10) = 18.020, p < 0.01$)。

2年生自身が「気になる生徒」と感じる特徴(図3-2)では、選択された割合が高い順に「家庭状況不安定」64.4%、「反社会的行動」54.4%、「友人関係不適應」31.1%であった。中学校で重視されていると思う「気になる生徒」の特徴は、多い順に「反社会的行動」57.8%、「家庭状況不安定」42.2%、「規則不適應」37.8%であった。回答者自身の意見と中学校で重視されていると思う「気になる生徒」の特徴の両者の回答に有意な差は見られなかった。

「気になる生徒」の捉え方と、学年、志望進路、「生徒理解・人間関係形成」効力感、教育実習不安との関係について検討するため、4年生と2年生の2群について、志望進路については教員、公務員、企業他の3群について、「生徒理解・人間関係形成」効力感と教育実習不安については平均得点より上位の上位群と下位の下位群の2群について χ^2 検定により回答結果を分析した。その結果、学年、志望進路、「生徒理解・

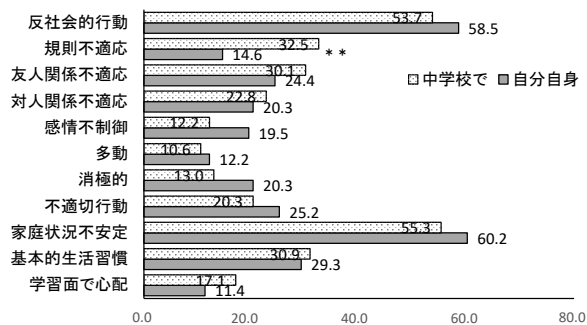


図3-1 4年生の「気になる生徒」の特徴

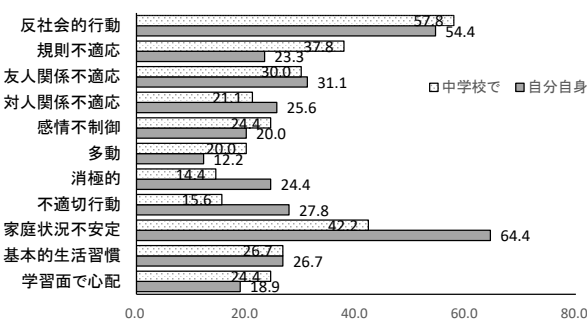


図3-2 2年生の「気になる生徒」の特徴

人間関係形成」効力感、教育実習不安のいずれにおいても有意な差は見られなかった。

V. 考察

本研究では、教員養成課程に在籍する学生の生徒理解について、「生徒理解・人間関係形成」教師効力感と教育実習不安、「指導が難しい生徒」および「気になる生徒」の側面からその特徴を明らかにすることを目的とした。

調査対象学生の「生徒理解・人間関係形成」教師効力感は、志望進路別、学年別の有意差は見られず、教育実習を経験した4年生あるいは教員志望学生で得点が高くなるということは見られなかった。一方、教育実習不安については、教育実習を経験していない2年生の方が教育実習を経験した4年生よりも生徒関係の領域および授業実践の領域ともに不安が強いことが示された。特に、「生徒の雑談が多くなり、收拾がつかなくなりそうで不安だ。」の得点が4.20点とあるように、授業実践中での生徒との関わりについて不安を強く感じていると言えよう。教育実習を経験することで4年生ではこのような教育実習不安は減少すると言えるが、教育実習の事前事後指導を中心とする教員養成課程全般において、「生徒理解・人間関係形成」教師効力感が高められるような取り組みが課題となろう。

「指導が難しい生徒」の具体像については、4年生、2年生ともに「内面の課題」と「不適切行動」の記述の割合が高かった。“教師の話を聞かない”“言うことを聞かない”“反抗してくる”などの生徒指導上の難しさだけでなく、“意思表示がない”“自己表現が少ない”“感情が表に出ない”など、実習生や教員が関わるきっかけを持つこと自体が難しい生徒も「指導が難しい生徒」と捉えていることが明らかとなった。また、「発達上の課題」について、4年生の回答では障がいや特別支援の用語を用いた回答が見られ、教育実習で特別支援を経験した影響があるのではないかと推察された。しかし、障がいや特別支援といった用語で生徒の捉え方が画一的にならないように、個々の生徒の指導の難しい状態はどのような状態なのかに目を向けられるように指導していく必要がある。

一方、「気になる生徒」の具体像として、4年生、2年生ともに「家庭状況不安定」と「反社会的行動」が多く選択され、生徒の行動の問題の背景として家庭環境を重視している面も確認された。秋光・大木(2020)の中学校教員を対象とした調査では、「指導が難しい生徒」および「気になる生徒」とも生徒の問題の背景にある家庭環境や保護者対応を難しいと感じている回答が最も多かったが、本調査対象の大学生という立場では実際に生徒の問題状況に関して保護者対応を行うことがないための意識の違いと考えられる。

教員養成課程に在籍する学生の生徒理解を深めるためには、「内面の課題」や「不適切行動」、「発達上の課題」など個々の生徒の指導の難しさの背景や要因を考えるとともに、生徒の望ましい行動を増やしたり、トラブルを未然に防いだりする方法を学ぶなど、生徒指導の視点に教育相談や特別支援教育の視点を融合させることが望まれよう。

今後は、保健体育以外の教員養成課程学生との比較や現職教員との比較などを通し、教員養成課程に在籍する学生の生徒理解に関する意識についてさらなる検討を進め、生徒理解や教師効力感の向上につながるような教員養成課程（保健体育）のカリキュラムを検討していくことが必要とされよう。

引用・参考文献

相澤雅文・増田優子(2016)教育実習が与える教師効力感への影響－教育実習前後のアンケート調査を通して－. 日本教育心理学会第58回総会論文集, 382.
秋光恵子・大木伸一郎(2020)小学校教員と中学校教員における児童・生徒理解に関する調査－「リ

ダー」指導が困難な子ども」および「気になる子ども」に焦点を当てて－. 兵庫教育大学研究紀要 57, 35-43.

Ashton, P.T. (1985) Motivation and the teacher's sense of efficacy. *Research on motivation in education*, 2, 141-174.

中央教育審議会(2015)「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」(答申).

春原淑雄(2007)教育学部生の教師効力感に関する研究－尺度の作成と教育実習にともなう変化－. 日本教師教育学会年報, 16, 98-108.

春原淑雄(2008)教育実習体験が教育学部生の教師効力感に及ぼす影響. 学校教育学研究論集, 17, 17-26.

平田佳弘・京林由季子・吉岡利貢 他(2018)中学校・高等学校教育実習(保健体育)の実習状況と実習生の意識. 環太平洋大学研究紀要, 12, 177-182.

平田佳弘・京林由季子・吉岡利貢・降屋丞・長谷川晃一(2019)中学校・高等学校教育実習(保健体育)の実施状況と実習生の意識－第2報－. 環太平洋大学研究紀要, 14, 73-81.

平田佳弘・京林由季子(2021)中学校・高等学校教員養成課程(保健体育)に在籍する学生の教師効力感の特徴－コロナ禍における実習指導を通して－. 環太平洋大学研究紀要, 18, 95-104.

五十嵐亮・宮内孝(2020)教育実習及び事前指導を通じた教師効力感, 教育実習不安及び教職意識の変容. 南九州大学人間発達研究, 10, 13-22.

大野木裕明・宮川充司(1996)教育実習不安の構造と変化. 教育心理学研究, 44, 454-462.

文部科学省(2011)生徒指導提要. 教育図書.

文部科学省(2016)幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申).

野口隆子・鈴木正敏・門田理世・芦田宏・秋田喜代美・小田豊(2007)教師の語りに用いられる語のイメージに関する研究. 教育心理学研究, 55, 457-468.

柳川真紀・大谷正人(2015)「気になる生徒」の理解と校内支援について－中学校の実態調査を通じて見える支援の視点. 三重大学教育学部研究紀要, 66, 281-293.

渡邊駿太・中西良文(2017)日本における教師効力感に関する研究の動向と展望. 三重大学教育学部研究紀要. 自然科学・人文科学・社会科学・教育科学・教育実践(68), 245-254.